Fuglede-Putnum a 定理9->a version 4月分大 强 岡守隆照 (Takateru OKAYASU)

1. A, Bが正規作用素ならば住意の作用業×に対してA ×-×以*=Oから A*X-×B=Oが確かわる。こりことはよる <知らトた Fuglede-Putnamの決理の主格するところである。 Barberian はA, Bが正正規作用業(hyponomal operator) いあってサメルには出来、らが正正規作用業にあれば同じ結論が 得られることを単した[1]。現在では×5 Hilber-Johnisht 作用業に限決したらくてもよりことが知られている(高橋[3]、 R.L. Moove-D.D. Rogers-T.T. Trent [2]). Barberian の 誘篇は不十分であったわけである。

しかし後の議論は作甲幸瑞海的でも殴ら宿む、るれを行在 怪(流めばたとらばつぎの今趣が成り立っことがわかるのである。 Aj, Bj が

を満た方正正現作甲東で×ドHillert-Schmidt作甲東はらば

$$\sum_{i=1}^{n} A_i \times B_i^* = 0$$

オ・ラ

が事かりる。―ここではこの分越の機を形を定れてしょう。

それは作用主権分方性がにおける一つのきたいな現象いあるとサることがひきる。

2. 目的の変現はつぎのとかりであり、

支強(S、子)を可測な向、たら(S、子)上の複素側後、Mを半存限型作用素機、ム、bをS上の blic南して本質的に有界ない値園教いつぎの条件を指たするのとする:

- (1) かにはしばんどあでてのへについて (1), な(1) が単正表し、

ちは、向紋入→ u(以)*xも(入)に移横を可限してまりの移猿 分可能)で

$$\int u(x)^* \times b(x) \, d\mu = 0.$$

特にMが何限程で自教スーチの(ハ)にも(ハ)が認識を可能ならば、从下於語された複章側度(しゃしハーンの分解はできてとする)としてよいし、な、人がし川に向して李傕的に有当であるという条件を答してよい。

この復建から砂座につぎの単が得られる。

五十 (S,平) E可測学的,从E(S,干)上的旅遊工人た涯景 脚度, A,13 ES上の行列值问数2~1 至9年円を1時に31の と33:

- (3) かに周しずんとすかての入について人(人)、ほ(人)が正規。
- (4) Mにはしられんじすべての入人(スキン)について A(人) A(人) = A(と) A(人), 13(人)13(以が=13(以がB(人)). (373)1 Xに計して) とのときもし引動な メーラA(人) X は(人)*、 スーチA(人)*

 3(人) が積ケ 可解で

ならば

$$\int A(x)^* \times 13(x) dx = 0.$$

至2 (S,于)を可測空間、从下(S,于)上の張素測度、A,Bをしいでルト空間ト上の、Mに向して本質的に有界な質界作用表値向数ですぎの条件を活にすものとする。

- (5) Mに向し記しいすべての入れついてALV1,13(2)が正正現。
 - (4) ルにほしまはんとうかての入人(スキス)について A(人)A(ハ)*=A(ハ)がA(ト)、は(人)の(ハグ=ほんがほん).

このときもしそH上の核性作用至Xに計して函数>→A(x)XX(x)が弱のchne、積为可能、函数入→A(x)XX(x)が弱可

(別) マ・つ

3. 定理の正明の概略を述べよう、

ス(ハールト)×人(ハ*、ソ(ハ)=ルム*×人(ム)(八・S) とおく、注意の中に「M* を集める、国歌以は Bochue 種が可能、国教中の当に可問から「川に関して本質的に特界であるから、注意の自然教のに計して Sのある分割 ひゃこくられないがなして、入れらられて送んで

スn(ハ= xkk), yn(ハ)= y(xk) (入ES) とオ·くときないは Bochmer 後 3·1万も2~

\(| \frac{1}{2} \langle | \frac{1}{2} \lang

しなるに

いあるから

$$\left\|\left(\sum_{k=m_1+1}^{m} \sum_{k=m_1+1}^{m} \sum_{k=1}^{m} \sum_{k$$

$$\left|\int_{\mathbf{k}=m_{n+1}}^{\infty} s_{\mathbf{k}}^{\mathbf{k}} \varphi(y_{n}(x)) d\mu\right| < \frac{1}{n}$$

と病たう自然数 Mnを戻のよことが ごきょ したがっ し

ただしくはしいいいのないある。

(1 \$ \$ = 4 + 4 (4 6 Mx, 6 6 Mx) & 3 3. = 1 a15 ((11), M, 4 - a1 -> 0 2 3 3 (7 13 M o tame).

このとき

とこでをはし、ロからを考え

「Zpu(Sh) y(>h) | 1 = | Zpu(Sh) x(>h) | 1 を示うことができる。39計算は長くなるのご割食するから この方はは本質的は13arbarianに1]の方はというじょある。

更归

しがるに リシャ(らん)な(スト)リア、リシャ(らん)ハ(スト)リイローナキロスクリカラマーらかしに対して

linsmy y ((これsh) y(xk))*(こからか)y(xk)) を114-azzllolく, かかのり ((これsh) y(xk)) マーフの上げ、からた まだし K13 11 を r (sk) y(xk) ||2 ローフの上げ、ある。 もかに 表であるから 実に

したがって

2 7 2

したがって

$$\left| \left(\frac{\varphi(y_{n}(x))}{\varphi(y_{n}(x))} \right) \right| = \left| \frac{\sum_{k=1}^{\infty} |\mu(S_{k})| \varphi(y_{n}(x_{n}))|}{\sum_{k=1}^{\infty} |\mu(S_{k})| \varphi(y_{n}(x_{n}))|} \right| + \left| \frac{\sum_{k=1}^{\infty} |\mu(S_{k})| \varphi(y_{n}(x_{n}))|}{\sum_{k=1}^{\infty} |\mu(S_{k})| \varphi(y_{n}(x_{n}))|} \right| + \frac{1}{\infty} = 0.$$

ーブ

2.5 327 6

海路の持つの対分は上の議論をサし直見すればまされる。

4. 定眠の積分を作用本機の旅位相に同る3積分として該 海したいところである(Mを有性性に限れば上のtechnique が使用るる)。

References

[1] S. K. Berberian. Extensions of a theorem of Fuglete and Putnam, Proc. AMS 71 (1478), 113-114.

[27 R. L. Moore, D. D. Rogers and T. T. Trent, A note on intertwining 14-hyponomial operators, Proc. AMS 83 (1981), 514-516.

[3] K. Takahashi, On the converse of the Fuglete-Putnam theorem, Ada (ci. Marh. 43 (1981), 123-125